

燉煌本本草集注序錄

注詔世用土地及仙經道術所須并此  
席錄合為三卷雖未足追踵卷前良  
蓋亦一家撰製吾去世之後可貽諸知

方 本草經卷上

席藥性之本源論席名之亦題記品錄詳施用之

本草經卷中

玉石草木三品合三百五十六種

本草經卷下

虫獸菜米食三品合二百九十五種  
有名無實三條合一百七十九種

合三百七十四

種 右三卷其中下二卷藥合七百卅種

各別有目錄並朱墨雜書并子注

大書外為七卷



第四卷 第四號

大正八年十月一日發行

(通卷第十六號)

研究

支那に於ける本草學の起源と神農本草經

理學博士 小川 琢 治

一 序 論

本草は支那に起つた一種の藥物學で、其の發達は醫術と相伴ひ支那固有の博物學となり、日本には他の支那の文物と共に之を傳來して、終に自然科學としての博物學に進んだのである。日本に西

洋博物學が傳來した際に日本の植物學が直に立派に出來たのは此の本草學が漢方醫家によつて研究されて居た爲めである。本草なる名は植物が藥品として最も多い所から起つたのであらうが、其中には動物礦物をも含んで居るもので、礦植物三界に互る博物學として纏つて居る。故に支那に起つ

た自然科学の中で天文学と共に最も著しいものである。

余の此の研究を試むる動機は、支那地理書中最も古い山海經の研究に當つて、其産物として擧げた植物、動物等に藥として効用あることが記載されて居るので、之を原始的の本草の古書と比較せんとしたのに在る。先づ神農本草經なる書が如何なるものかを知りたいと感じて森立之の復原したものを讀む際に、楯瑞超師の燉煌石室から獲て還られた陶弘景の本草集註の第一卷を觀ることが出来たので、本章に關する古本に就て大に興味を感じたのである。今日現存する本草の完本は宋證類

の原本を窺ひ得たのである。此の研究を進める間に徳川幕府時代の森、小島丹波等の諸醫家及び岡本況齋の余と同じく本草古本の考證を試みた著書を讀み、本草の内容に關して一草一木の名實の異同のみを吟味する明代までの支那學者の研究と方向を異にした先覺者を知つたのである。

本草のみで、日本には此外に仁和寺の唐新修本草零本五卷があるが、其以上の古本は從來知れて居らなんだ。然るに楯師によつて六朝末即ち唐以前の古寫本と想はるゝものが世に出て、其が仁和寺本に缺いた所の序録の部分を補ひ、且つ梁陶弘景

余は此の如く古本に溯つて研究したのであるが今御話の順序としては上古の藥物に對する幼稚な考から出發して次第に進歩した徑路を辿る方が理解し易いと思ふ。故に先づ簡單に時代の順に進歩の跡を逐ひ、文化史の一部としての藥物學の變遷を述べる。

## 二 山海經の藥物

支那に於ける藥物の最も幼稚な考が見えるのは山海經の初五卷五藏山經の部である。是は多分戰

支那に於ける藥物の最も幼稚な考が見えるのは山海經の初五卷五藏山經の部である。是は多分戰

國以前の書で、其使用法は「之を食すれば」といふものゝ外に「之を佩ぶれば」又は稀に「之を服すれば」(西山經翼望山の獸に讎といふものを之を服すれば) 痺を已すといふ黄疽の藥なり) といふものが頗る多い。即ち藥の効用は厭勝 Charms (Amulets) 又は呪符の如きものとなつて居る。後世の服藥といふ熟語の服の字は此の佩の字と同じ義から轉化したもので原始的意義を傳へて居る。

此書に見えた玉石草木鳥獸蟲魚の類頗る多く、其鑛物のみにても黄金赤金白金銀赤銀銅赤銅鐵錫赤錫、雄黄、青雄黄、丹粟、青護、丹瓊、碧綠、流赭、礬、青碧、石涅、磁石、箴石等があつて、頗る種類に富んで居る。然るに本草に見えたものと同種の藥で効用の一致するものは礬石の如き一二の外には殆ど見えない様に想はれる。是から考ふれば博物の智識は戰國頃までに既に相當に進んで居たが、藥物學としては十分に出來て居らぬと

推定して大なる間違ひはなからう。即ち藥物其ものゝ明瞭確實な効用反應に重きを措かずに、巫覡の厭勝によつて疾病を禳うて醫術其ものによつて治療することを知らぬ幼稚な未開民族の境遇から餘り進んで居らぬ。尙書の周公が武王の爲めに禱つた金縢の篇に、其頃疾病あれば之を禳うた遣り方が見える如く、又た孔子の病を門人が禱らんとした話が論語に見える如く、戰國以前には此の如き状態が一般であつたらうと想はれる。

### 三 戰國時代の藥物と醫術

戰國時代に至ては醫術の進歩と共に藥物使用の智識も餘程進んで居たことは孟子に藥瞑眩せざれば其病癒えずといつた如き語から推測される。又た周禮の天官に醫師食醫疾醫瘍醫獸醫を擧げて居るのは同じく此頃の醫師の分科を窺ふに足るもので、史記列傳百五扁鵲倉公傳に扁鵲が趙の邯鄲に

至り帶下醫となり、東周の洛陽に至つて耳目痺醫となり、秦の咸陽に至つて小兒醫となつたといふのと共に、醫術の分科がある位まで頗る進んで居たことが明かである。其治療には服藥の外に針按摩灸(熨)等の方法を用ゐ、又た剝皮解肌の外科的手術も行つて居る。然れども扁鵲の受けたといふ長桑君の禁方なるものが如何なるものであつたか傳はつて居らぬから藥物の智識如何は分らぬ。漢に入つた後の倉公の場合にも醫藥方といふもの及び乘陽慶の傳へた禁方書といふものが見えるが、其等が如何なるものであつたか分らぬ。唯史記の文によつて其病源及び治療法の根本義即ち原理は陰陽五行説から出發したもので、黄帝内經として傳はつた所と大體に於て異つて居らぬことが確かである。従つて黄帝内經は完成時代の何時に屬するにせよ略ぼ戰國時代、即ち支那文化の起原を五帝なる神話時代に持て行かんとする傾向の盛んな

頃に醫學として出來て居たもので、其後秦漢の間に多少の増補訂正は行はれたとしても、其の根本義に大變化を及ぼす程の進歩はなかつたらうと想像し得る。

#### 四 前漢末に起れる本草

本草なる語の初めて現はれたのは、前漢末であつて本草なる獨立した書物は漢書藝文志に載せて居らぬ。本草なる語は漢書平帝本紀元始五年に、「學<sub>下</sub>天下通<sub>上</sub>知方術本草<sub>者</sub>所在<sub>昭</sub>傳、遺<sub>詔</sub>京師」といふのと、同書樓護傳に其の少かくして鑿經本草方術數十萬言を誦すといふの<sub>と</sub>に見えた位である。

史記倉公傳に載せた處方に藥名の判然たるものは僅かに滑石、半夏、菘藪、苦參位で、其内効用の確かなのは苦參である。然るに其効用は今傳はつた本草の藥物に記載されて居らぬ。大觀本草に

初めて史記を引いて其の効用として補つたのである。是に由つて之を觀れば春秋戰國の間に知れた藥物は少くなかつた筈で、漢に至つて之を處方に用ゐたのも疑なく、醫術の進歩と共に藥物の智識の進んだ一斑は倉公樓護の傳から想像されるが、今の本草の記載とは符合するものでないらしい。

即ち本草の名は既に前漢末に現れたが、未だ完全な本草學は出來て居なんだと考られる。

此の點に就て一言すべきは孫星衍の説で、其の神農本草經を校定する際に藝文志の神農黃帝食藥七卷を以て、賈公彥周禮醫師疏に引いて食藥とせるを正しいとして、此書即ち神農本草經ならんと考へたことである。然れども禁方といふ語と共に食禁といふことも考へ得られるし、又た假令食藥が正しいとしても直ちに本草經と同一と斷言し難い。少くも今傳はつた後漢の地名を以て産地を擧げたものを直に其書といふことは無理である。故

に孫星衍の本草を以て藝文志に別名で既に載せて居るといふ説は探る價值がないと考へられる。

後漢に至つては神農と子儀の名が鄭玄の疾醫の「以五味五穀五藥養其病」の註に五藥は草木蟲石穀なり、其治合の齊は則ち神農子儀の術に存すといふ文に記され、又た後漢末に出た華佗の弟子吳普本草が唐代まで残つて居たことから、彌々本草なる書物の立派に出來たことは疑ない。梁陶弘景が本草集註を著はすに當つて基いた所の書は當時に傳はつた所謂神農本草經であつて、是は多分晉張華の博物志にいふものと同一であらう。此の書が李時珍の本草綱目の出るまで、歷代に増補され來つた底本となつた。然るに宋版以來陶隱居の序文に草の字を脱した爲めに後世には神農本經と呼び明庶復の如きも誤つて其復原した書名とした。今燉煌本の序文によつて、此の誤謬たることが知れた。

### 五 神農本草經の性質と眞作威年代

支那に於ける本草經なる書は此の如く冠するに神農の名を以てするものがあつても、其の最も古いのは鄭玄の「神農子儀之術」といつた位で晋張華の博物志に至つて明瞭に其名が記載され、梁の陶弘景に至つて其の全文に増補註釋を加へたのである。故に神農といふ名があるからといふので直に所謂三墳五典の類であると斷定は出來ぬ。又た書物其ものに神農といふ語は出て居らぬ。黄帝内經素問は冠するに黄帝の名を以てするのみならず、其本文は黄帝岐伯に病のことを問ひ、岐伯が之に答へた問答體の文である。周髀算經なども周公が商高に天文のことを問ふた形で、従つて周公の傳へた書といふのである。本草經は此の如き形式を具へて居らぬ。即ち書物の内容から觀れば此の如き上古の聖賢に假托して世俗の目を眩惑するとい

ふ何等の惡意はないのである。故に此書の性質は眞正(ヂェニユイン)のもので黄帝内經素問や周髀算經に比べて却て假托の氣分が少しもない。書物は神農に假托するの意なしに作られて居たのが、後に何人か々本草の最も好い經文であるからといつて、之に神農百草を嘗めて醫藥を發見したといふ傳説に附會して神農の名を附加へたのである。支那の僞物といふものには往々品物の製作者は僞物を作る意志なしに作り、其が古く見える所から何人か々後に古代の有名な人又は古い年號などを書添えた爲めに僞物の中に編入せねばならぬことになるものがある。神農本草經を僞書といふならば此の如き意味の僞書である。

陶弘景は文字未だ有らざる時代の神農の不刊の書で、其智識を語り傳へたのが後に桐君雷公の輩が書物としたものと考へて、産地名が後漢の制度である所から張仲景華佗等の手を入れたものとし



たのは當時に在つて妥當な意見である。今我々が觀れば其藥品たる植物には葡萄の如く漢代に西域から傳來したものがあり、又た其効用は漢以前の醫家の認めたる所と合はぬ點がある。之を山海經の藥物に比較すれば一層差異は著しく、彼に在つては極めて幼稚な民族の思想を代表し、是は醫學の智識の餘程進んだものである。故に述べ來つた如く漢末即ち西域交通後に進歩した藥物學の智識を綜合大成した書物と考へるのが適當である。此の如く進んだものが山海經などより前に出來て居たと考られぬ。余は藝文志より後に後漢に至つて西曆第二世紀の頃作成されたとするのが最も正鵠を得たものと考へる。

西域交通後に出來たとすれば、西洋藥物の智識がどの位附加へられたかといふ疑問が當然起る。マスペロの埃及上古藥物使用の記載に比べて見るに其使用法に湯酒等に漬す外に、散藥丸藥膏藥と

して用ゐる仕方のあるのは埃及に既に行はれて希臘にも傳はつたもので、序録の文は此等の西方の古代藥物學に符合するのである。余は未だ箇々の藥物に就いて西洋古代の藥物學の書物と對比して居らぬから、果して一々の藥物中に西洋の智識が含まれて居るか否かを斷言し能はぬ。然れども張仲景や華佗の開いた新しい内科及び外科の治療法と共に西域交通の影響の支那藥物學に及ぼした所は相當著しいものであつたと想像する。此の事實は漢書藝文志に載せた方技三十六家と隋書醫方二百五十六部とに含まれたものを比較して容易に知れる。

之を要するに、ブニウスが「博物志」Natural History を書く時に持て居た智識に類似の思想が全體として漢の西域交通によつて支那に輸入されたとして考へるのは敢て其影響を過大視するものであるまい。尤も此交通なしに支那にも段々此の如き博物

の智識が戰國以來進歩して居たと考へ得る事實のあるのは全然否定されぬ。然れども其と系統を異にした藥物學の進歩した考が輸入されて、醫術藥物共に非常なる長足の進歩があつたものとするのが寧ろ妥當の見解である。神農本草經なるものは此の如く内外時勢に伴ふ進歩の産物であつて、西域交通の影響を受けたことを否認することは出来ぬ。

## 六 神農本草の原形

本草學の完成した書物たる神農本草經は今其原形のまゝでは傳つて居らぬ。其篇目に就いて古書目を調べて見るに頗る區々で、隋書經籍志によれば

神農本草八卷 梁有神農本草五卷、……屬物二卷、神農明堂圖一卷

及び

神農本草四卷 雷公集註

神農本草經三卷

の二種を擧げて居る。是で見れば前の八卷本は本文五卷と、附録三卷から成立て居たらうと思はれる。然るに陶隱居の集註序文には「今之所存有此四卷」といひ、宋の掌禹錫の嘉祐本草を作る時に此の序文に考證を試みて、「講按唐本亦作四卷」といひながら、「今按、四字當作三、傳寫之誤也」と斷定して、其理由として「按梁七錄云神農本草三卷」といふ後の分を擧げて居る。此の掌禹錫の誤謬は森立之の反駁が正しく、燉煌本即ち唐以前（少くも隋朝）の古寫本にも陶序に四卷となつて居る。故に陶弘景の見たのは、四卷本であつたのは疑ない。

隋志に次に擧げた三卷といふは陶隱居の校定して作成したもの、即ち隋志の八卷の脚註に梁七錄を引いて

隱居本草十卷

## 陶弘景本草經集注七卷

とある中の集註とあるものを隋志に別に載せたものと想はれる。掌禹錫の梁七錄を按ずるにと云ふ語は疑はしいのみならず、此の關係沿革を無視したものである。

要するに神農本草經の篇目は此の如く區々なるも、其の内容は陶弘景集註に包括されたものである。陶弘景以前の古本の一は集註陶序にいふ四卷本で、是は恐らくは第二に擧げた雷公集註といふものと同一なるべく、一は第一の神農本草八卷本の初五卷であらう。

## 七 神農本草經の内容

神農本草經の陶隱居以前の古本の内容を窺ふに足るものは張華博物志の藥論で「神農經曰」として三項を擧げ其二項は大體一致し、何れも今の序録及序例に見えるもので、一項だけは見當らぬ。是

で見れば、張華の見たものと今本とは同一の系統で、或は異本があつたか又は陶隱居が多少増減したものである。兎に角之から推せば序録即ち總論の部と藥物各論の部と二つの部分から成立て居たことは明かである。今日傳はつた本草經の形式は三國西晋の間に行はれたものと略ぼ同じく唯時代の進歩に従ひて陶隱居以來幾多の新しい藥物が附加へられ唐宋の諸本草となつたまでの差異である。

陶隱居以前の神農本草經を此等の今書から再造せんと試みた學者には明の盧復（萬曆刊本、寛政十一年鈴木陽谷複製）清孫星衍（乾隆刊本）があつて何れも神農本經と名けた。森立之の神農本草經（嘉永七年刊）は最後に出たが明清學者の觀る能はざりし鈔本新修本草醫心方等の宋槧本以前の醫書に據り考定したもので兩書に比して全く面目を異にし最も古本の眞に近かいものである。盧孫兩氏

の書名は宋以來の本草の陶序に「舊說皆稱神農本草」とあるに本づいたので燉煌本によれば其の草の字を脱したものとすることが明かとなつた。森氏は之を因襲せずして直に隋唐志の書名に従つたのは其の達識を見るべき一例である。

然れども此等の諸家の努力は大に多とすべきと同時に其の自ら復原したりと考へた所は大抵陶氏の刪添を経たものまでであつて陶氏以前のものではないことを記應せねばならぬ。陶序によれば

今之所存、有 此四卷、是其本經、所出郡縣、乃後漢時制、疑仲景元化等所記、又有桐君採藥錄、說其華葉形色、藥對四卷論其佐使相須、魏晉以來、吳普李當之等、更復損益、或五百九十五、或四百卅一、或三百一十九、或三品混糅、冷熱舛錯、草石不分、蟲獸無辯、且所主治互有得失、醫家不能備見、則識致淺深、今輒苞綜諸經、研括煩省、以神農本草三品合三百六十五爲主、又進

名醫副品三百六十五、合七百三十種、精麤皆取、無復遺落、分別科條、區畛物類、兼注諸世用土地所出、及仙經道術所須、并此序錄、合爲七卷とある。則ち今の本草は此の如く陶氏の手から出たものが底本で其以前の所謂神農本草は科條の分別物類の區畛が不十分不完全なものであつた筈で或は草石蟲獸の區別も判然とはなつて居なんだ。陶氏の基いた四卷本なるものは到底復原することは出来ぬことは明かである。

故に諸家の擧げた所から藥物の種類名稱は略ぼ最古のものを推知し得るが其の順序及び記載の詳細は決してあてにはならぬ。

此の如き次第であるから近時燉煌から本草集註の卷一序錄の部が完篇を發見されたことは本草學の研究史上に非常に面白い資料を獲た譯で、是によつて少くも陶隱居本の舊觀を窺ふことが出来るのである。

今此の最古の抄本と從來の本草の文を對比するに頗る異同あることが發見され、又た其の體裁に就いても變遷の過程を追跡し得るものがある。

## 八 朱墨文と白墨文

支那の古書に於て經と傳又は註との文を區別する爲めに朱と墨とで書き分けるのが慣用の體裁であつた。五經の如き儒家の經書に在つては墨字で經文朱字で註文を書いたのであるが、本草經では原經文に朱を用ゐる後世の補加した文に墨を用ゐて區別した。陶序に「朱墨雜書、并子註大書分爲七卷」といふのから考ふれば此の區別は陶隱居の手に整頓さるゝ時に出來たらしい。宋初開寶本草を編纂し上木する際に朱字の代りに墨地白文を用ゐて此の區別を保存し他の經書の如く文字の大小及び空格割註等の體裁と異つたものとなつた。

然るに宋槧本以前の古抄本唯一の殘篇たる仁和

寺の唐新修本草を觀るに傳寫の間に朱が用ゐられなくなつて全文を墨字とし其の區別が全く無視されて居る。其代りに各割註の下に謹案の二字を加へて宋槧本に唐本註云と云いふ見出しの區別のものを載せた。

燉煌本でも每章の行を改めずして寫し其章頭に朱點を加へて區別するのみで朱字を用ゐた文はない。唯陶序の次の

本草經卷<sup>上</sup>割註本草經卷中<sup>同</sup>本草經卷下

の十五字だけに特に朱點を各字の中央に施して居る。今の本草の序例に白字とした「上藥一百廿種」以下の經文には章首には朱點のみで此の區別がない。前に掲げた陶序に「藥對四卷、論其佐使相須」といふ語あるのから推せば、陶隱居は序錄の上藥云々以下の文を名醫の附加したものと考へたとするが當然で、従つて其の朱點を施さぬのが正しい。陶氏校定本であるべきであらう。

唐本草以下陶註を細字割注に降したが序録の陶註は其儘に大書したか如何は殘闕の爲め確知されぬ。然れども宋槧本にも序録の陶序を大字で載せた所から推せば多分唐本草にも序録だけ陶氏の舊様を存じたのであらう。

然るに後に大書中に陶註の「本說如此、今案」の語を冠して居るのを以て原經文に對する名醫の所傳と妄斷して上藥云々の如き本文を盡く神農本草の經文とし朱點を施したので終に宋槧本に傳へて白文となつたのであらう。

故に燉煌本によつて陶氏の試み朱墨書き分けの體裁が一轉して其の煩を避けて全文を墨書し朱點を字の中心に加へるものとなつたことが知れる。狩野博士の巴里で見た燉煌本經書の斷片にも朱點を施したのを見たの（藝文第六年第二號）と併せて考ふれば、朱墨雜書に代用した朱點區別法が六朝より唐代まで一般に行はれたことが知れる。

更に進んで仁和寺本新修本草は此の如き寫本から日本で傳寫するに當つて、其の殘された朱點をも無用の長物視して省いて、終に全く朱墨の區別のないものとなつたことも是から推定し得る。

### 九、唐宋諱字

燉煌本本草集註序録は卷末に

開元六年九月十一日尉遲盧麟

於都寫本草一卷辰時寫了記

の二行の奥書があるが其前行は墨色著しく濃く字體が前後の書風と異つて後の書入れたることが明かである。余の之を六朝抄本と斷定した理由は書風と其の文に出る唐代天子の諱字が一も避改闕畫して居らぬとの二點であつて其上に此の紙を反古として其裏に書いた大智度論の立派な唐寫經であることが有力な傍證である。

之を現行本に對比するに唐代新修本草を撰する

に當り唐初三代の諱字を改め、宋以後更に宋歴代の諱字を改めたことが知れる。其著しきものを示さんに陶隱居序文の

惠被生民(群生に作る) 世用(時用に作る)  
又た序録の文の

許世(子(太子に作る) 世用(俗用に作る))  
密覆勿泄 泄精(共に洩に作る)

等の如き何れも太宗諱世民の二字を避け延いて其字畫の含まれた字までも改めたのである。現行本に二三の世及び民の字を存するのは恐らく其遺漏でなければ闕畫を復舊したのであらう。

又た序録の文に

主治 治病(共に療に作る) 採治(造に作る)  
至殆命(殞に作る) 治葛(野に作る)

の類があつて是も高宗諱治の字を避けて台を含む字を悉く改めた。

治病 療病

治病理難即効 療病固難即効

採治 採造

治數百杵 擣數百杵

に作るは高宗の諱治を避け改めたるべく又た

至殆命 至殞命

治葛 野葛

に作るのは字に治の一部に台字あるのを避けたのであらう。

蓋し此の唐初三帝の諱を避けたのは高宗の顯慶中に蘇敬の新修本草を編纂するに當り加へた所であることは殆ど疑を容れない。

此の外に序録陶註の竟字多く畢に作り藥名恒山を常山に作るのを認むるも是れ恐らくは宋槧本に屢鏡恒の字に缺畫を施すと同例であつて、唐穆宗の諱恒を避けたつてはあるまい。而して宋代改竄の尤も甚だしいのは前に挙げた殷淵源の場合であつて名が唐人に改められた後更に其姓を改めたも

のであつて全く別人の如くなつた。

又た序録中に挙げた名醫の名殷淵源の如きは、今本に商仲堪に作り唐太祖の諱淵を避けて新修本草に殷仲堪とされ宋本草には更に其姓殷を宋太祖の諱匡胤を避けて終に商仲堪とされたもので姓名共に改められた最も極端な悪例である。

此の外に陶註に竟の字は多く畢に作り恒山は常

山に作るの類宋本草の改めたる所もある。

凡そ此等の例は唐抄本から宋槧本を経た支那古書を読むものが記慮せねばならぬことであつて、單に本草經のみの問題でない。今日宋槧本既に稀觀に屬するのであるから本書の如く明かに唐宋の勅撰に係るものを其原以前の文に溯り得るのは文献學上頗る重大な意義を有する譯である。

## 足利學校の盛時と西教宣傳

文學博士 新村 出

足利學校が其の學風を以て日本の文教界に重きを成したのは、戰國時代までであつて、天正十九年豊臣秀次が東征の時に於て、書籍什器を收むると共に、瘁主三要をも隨へ來り、上國の文運に資

するの機を作つた以來といふものは、學校は單に關東の一郷校たるに過ぎざる有様に成下ると共に之に反して珍籍の秘庫としての價値が、徳川時代を通じて、益々高まり、其の盛名は明治大正の近時にまでも失はれないやうになつた。一言すれば徳川時代文運興隆の以前までは、足利學校は學校